

LLM による打合せログからの要求仕様書生成

山田研究室
T121009 飯田 琉斗

1. はじめに

プロジェクトにおける要求仕様書は、現在人手に依存している。昨今、技術発展している生成 AI を用いて人の代替にできないかと考えた。しかし、生成 AI をそのまま使うのでは、期待通りの運用ができないことが分かり、補助を含む自動化システムの開発を行う。

本研究の目的は、AI 生成と人手作成それぞれにおける課題を解決し、当プログラムを用いて、人の代替となりえるかを検証することである。

2. 研究方法

生成 AI は、一度に命令を与えると、安定性、再現性が低下するため、2 段階にフェーズを分け、各フェーズで出力を記録し、この課題を解決する。

1. 打ち合わせログ JSON を用意し、生成 AI に渡し、分類属性ラベルを付与した JSON ファイルを出力させる。
2. ラベル付き JSON を読み込み、決定事項と時系列情報を取得し、雑談などのノイズを除いた決定事項 JSON を出力させる。
3. 決定事項 JSON を参照し、指定テンプレートに反映させる。

評価方法として、2 つの打ち合わせログをそれぞれで定めた温度パラメータを用いて、もう一方を評価することで、議事録に

合わせた調整ではなく、他データに対しても有用であるといえるかを検証する。

また、人が行うには、数時間かかる処理を AI でどれだけ短縮し、どれほどの抽出精度であるかを 10 回の試行の平均より測定する。

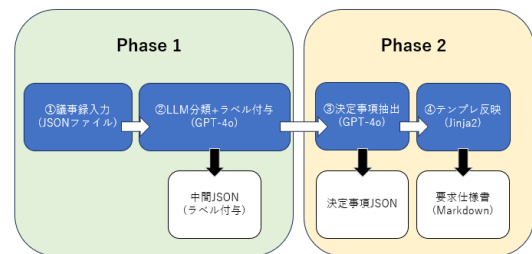


図1 システム構成図

3. 結果と考察

補正を行った出力からは、素の AI 出力と比較し、抽出率が 5~8% 高く、生成 AI 特有の予測推測の影響が小さいことが分かった。しかし、予測推測を含め生成 AI の特徴を完全に制御することはできなかった。加えて、データはすべて日本語で記されているが、出力結果には、英語が含まれており、これは、生成 AI が英語を用いた学習を行っているため、言語翻訳を行わず、そのまま出力した結果ではないかと考える。また、AI は学習したデータをもとに、テキストを読みこみ分析するのに対し、人は雰囲気や感覚といった曖昧な情報で処理できることから、決定判断に対して明確な単語を含まないログに対しては、精度が落ちることが予想され、現状、実用化には AI に合わせたログが求められる。